

## 走水 濁流

これは前半にあたる走水神社のオトタチバナヒメの話の続き。

24日に豪雨が降り、京急線が不通になって、今日26日昼に埼玉へ出かけた際もまだ京急は不通だった。ひどい大水だったのだといまさらに分かった。

天の走水は止速で走っている静寂の詞であるが、地の方は土砂崩れを起こす濁流である。天界の静流に対し、人間界の濁流とも言える。

オトタチバナヒメが荒れ狂う海を静めるために身を投じた場所に後に櫛が流れ着いたという。オトタチバナヒメの遺した唯一の所持品が櫛。櫛は「クシ」と読むので「空詞」と当ててみた。空詞ならば天上天下平穩無事である。しかし人間は自我意識で言語を使っている為どうしても世界は競争と闘争の明け暮れになってしまう。

荒ぶ自然界を常態に戻す決め手はなにか

太母さんの「舟を岸につなぎなさい」のことばが頭にこだました。「空詞」が「基詞」にならないかぎり語意識によって汚濁はますます加速され、地上は地獄のように暑苦しい。集中豪雨による洪水も日本各地で頻繁に起きている。水が荒れているのだ。

さて、地上の静流の方はどうか？名前ばかりの静流である。埼玉の東川口という場所で桑原さんのヒーリングを受けた際の内観によればまだまだ濁流である。その前から緊急に処理が必要な課題として、心の深い部分に根強く残っている怒りの問題があった。この数週間ちょっとしたことでプリプリ腹が立つ経験をしている。それをあまり表現しないで、内に抑え込んでいる為怒りの毒素の身体に与える影響を直接的に体験し、学ぶことが出来た。「怒」は「奴+心」奴は人間という意味であるから人間の心の状態は主に怒だと示されていることになる。この「怒」が天から与えられた字分けの課題だと受け止めた。肉体的苦痛を招く怒りの体験を踏み、踏むことでやっと少し理解できることが出来る。肉体がなければ経験はできない。それで9(苦)月26(フム→踏む)日にこのワークをしている。

人の心の奥底にどっかりと根を下ろしている怒りが荒ぶ人間界を現出しているのだ。その心が自然界をも荒れ狂わせている。環境は人間の心の状態の反映なのだという事を多く人はまだ知らない。身を以て怒りの毒素に侵されている身体のこわばり、痛みを観察しながら毒素を解放して行く。頭の中でことばを回しながら筋肉にからみついている苦しみ、悲しみ、怒りの記憶という汚濁を解放して行くと、そこには代わりに静寂が満ちてくる。濁流と静流。轟音と静寂。私の中のハルマゲドンだ。

余談だが(実は余談ではないのかもしれない)、今年の4月25日に東京の山手線の車中で八田さんの光透波講座研究会で学んでいる中村充代さんという人にバッタリ出会ったこ

とがあった。同じ時刻に山手線の混雑した車中で同じ車両の同じドアのところに二人がいなければ会うことはない。それだけでも奇遇と言える。その前に会ったのは2010年の4月19日だった。その人が昨日突然桑原さんを訪ねてきて、今日計らずも（計られていると思うが）私に来ることを聞いて待っていた。山口の人でしょっちゅう東京に来るわけではなく、この前に来たのが4月25日だったとのこと。どちらの上京時にも出会えたわけである。このような時は当然字分けをする必要がある。中村充代さんに会った日の数値もまた重要な情報であるが、ここでは深くは展開しない。一つだけすると、この人は詞（4）の内容を解く（19）人たちの「光透波の会」に4月19日に入会されている。

音の方はナカムラミツヨさんなので、字を当てると、名加無裸實通四となる。人の心の中にも充ちている無の裸（ム、ラ→実体）という本質が静寂であり、これが真我の属性である。轟音の汚濁から心の中が静寂に充ちている状態に代る、つまり無の實體に通じるためには天鏡図の四の行の「タ、チ、ツ、テ、ト田、智、通、弓、透」を理解して行ゆくことが大事。

この数週間様々な感情の洪水に苦しんでいる時にいつも聞こえてきたのが、次の太母さんのことばだった。

心を静めて静寂の音を聞きなさい。

音なく奏楽されている百千種楽の中の一つの響きがあなただす。

あなたのもとの声（ことば）とご対面なさい。

三浦半島を襲った豪雨による濁流の走水が京急を不通にした。

三浦はミウラ、すなわち實裏。これは現象の裏にある實體の方なので「音」を指すと、八田光典さんに昨日教えていただいた。

浦はシ+甫に分けられる。至高の詞は裏にある。表に現れていないために人間の語意識では直接的には捉え難い。しかしウラが于（宇宙）の裸（実体）で三、つまり實であると音がそう指示している。三はサンと読み、左云と当てる。左はヒタリと読み、直（ヒタ）の理を当てる。天に直の理とは真理のことを指す。絶対のフ（普く負っている）ものとは止速で回転している光のことで、これはC<sup>∞</sup>の光、光透波である。この三と浦（漢字の意味では裏と同義）宇宙の實體である至高の詞であるという二文字の地名で土が崩れた。土は分けると十と一になる。十はト、一はヒと読み、合わせてトヒ→問となる。問かけると必然的に姿を現すのが真理という透明の答で、これは問わないと現れない仕組みになっている。人（ヒト）とは問う者という意味なのである。まず自分とは何か、心とは何か、生命とは何か、感情とは何かを問うことで謎は崩れてその内容を露わにしてくる。私はそしておそらく人間はもっともっと真剣に問いなさいと言われているのだと受け止めた。

